

研究だより 第3号



未来の京都創造研究事業は、「大学のまち京都」の『知』の集積を活用し、未来の京都づくりに向けた政策を創造するため、大学の研究者と京都市の担当部署との協力により調査・研究を行っていただく事業です。

前号に引き続き、今年度の調査・研究テーマのうち2つを紹介いたします。

指定課題2

自転車の走行環境整備における知覚心理学の活用についての研究

研究の概要

自転車利用者の逆走の防止効果のある錯視デザインや、一時停止等交通ルールの遵守により自然な感じで誘導するピクトグラム（絵文字）など、錯視・錯覚・だまし絵としてその応用が限定的に社会に還元されてきた知覚心理学あるいは認知心理学の知識を動員して、京都市の自転車の走行環境の整備に貢献することを目的とする。

研究メンバー

- 北岡 明佳
（立命館大学文学部・教授）
- 林 勇吾
（立命館大学文学部・准教授）
- 對梨 成一
（立命館大学衣笠総合研究機構・専門研究員）

デザイン立案

さかさ絵の技術を活用し、自転車利用者の逆走の防止効果のあるデザイン、一時停止の遵守を促すためのピクトグラムを作成した。他に、さかさ絵やトリックアートの専門家の力を借り、デザインを作成。

順方向に見ると自転車に見え、逆方向に見るとびっくりした顔に見えるさかさ絵（2015年北岡先生作成）



そして・・・

新たに作成したピクトグラムやさかさ絵の技術を活用したデザインは、逆方向から見る者に意味はすぐに理解でき、かつ過度の驚きを引き起こすほどの強度はないことが分かった。今後、自転車政策推進室とも協議しながら、市内の自転車走行環境整備等に活かすことを目指す。

左から、北岡先生、林先生、對梨先生



研究グループからひとこと

だまし絵を交通政策に応用するという試みは特に新しいものではないと思いますが、本格的に取り組んだのはこれが初めてかもしれません。

錯視デザインにおける事実上のオンリーワンである北岡、さかさ絵・トリックアートの第一人者の作品を揃え、実験心理学的及び生理心理学的な検討を行いました。研究時間が十分取れませんでした。培った知識と経験は、今後の各種の交通政策への応用が期待できます。

実験

昨年8月、作成したデザインを用いた簡易実験を実施し、関係者や市民モニターからのご意見を得た。そこでデザインの視認性等の課題が浮かび上がった。



路面上にさかさ絵を表示して実施した、昨年8月の簡易実験

また今年2月、さかさ絵を活用した心理生理学的実験を行い、順方向と逆方向の歩行による観察時の心拍数を測定した。

逆方向から見たときにはぎょっとする刺激なので順方向よりも心拍数が増えるという可能性を検証した。



さかさ絵を視覚刺激として用いた、今年2月の実験

未来の京都創造研究事業 成果報告会・交流会

2016年3月22日（火）17:30-21:10

キャンパスプラザ京都 にて

※成果報告会は申込不要、交流会は事前にお申し込みください。

自由課題2

京都市におけるまちの居場所運営の継続要因及び終了要因の抽出

研究の概要

社会的孤立や孤独死の解消に向けた「まちの居場所」づくりに対して、京都市では助成制度を用意しているが、残念ながら運営を終了する居場所が後を絶たない。主に京都市内のまちの居場所の運営者や運営を終了した方への聞き取り調査を通じてまちの居場所の継続・終了要因を抽出し、行政によるまちの居場所づくりへの支援やかかわり方の基準づくりに役立てる。

研究メンバー

- 小辻 寿規
(京都橘大学現代ビジネス学部・助教)
- 平本 毅
(京都大学経営管理研究センター・特定助教)
- 三猪 悟
(大谷大学大学院修士課程・院生)
- 大田 雅之
(京都橘大学大学院前期博士課程・院生)

事例調査

京都市内のまちの居場所の調査から、継続要因としては運営者に対する周囲の理解やサポートが大きく、京都市による助成制度が主な要因となっているものはないこと、終了要因としては金銭的課題よりも運営者自身の健康問題や生活環境の変化が大きいことが見えてきた。

また、京都市では運営者と行政の関係が希薄なケースが多いが、他地域の先進事例では、まちの居場所と行政が密接に連携しているケースが多く見られた。



昨年8月に行われた、まちの居場所運営者へのインタビュー(伏見寺田屋浜 Piers'n'Peers)

今年2月に行われた、まちの居場所シンポジウム2016-居場所にはどんなサポートが必要か-の風景



シンポジウム

まちの居場所の運営経験者を招いて今年2月にシンポジウムを行い、運営経験者の生の声をお聞きました。「運営者は孤立しやすい」、「居場所の立ち上げにはスキルが必要であり、助成金以前に運営者を育てる手立ても必要」、「助成金の金額が少ないこともハードルとなっている」、といった現場の声が飛び出した。

見えてきたこと

これらから、まちの居場所の継続のためには、運営者がある時々で何を必要としているか、金銭に限らない様々なニーズについて随時モニタリングを行い、運営者自身が孤立しないようにサポートすることが必要だと見えてきた。聞き取り調査結果のナラティブ分析の結果も踏まえ、より包括的な社会的資源を提供する支援体制を提言したい。

研究グループからひとこと

この調査を通じて、とりわけ個人が運営している居場所の場合、居場所自体が孤立しやすい状況にあることが見えてきました。また国内に様々な先進的な取組があることも分かってきました。そうした先進事例も参考にしながら、より具体的な提案ができるよう調査結果を精査して報告をまとめたいと思います。



左から、小辻先生、平本先生

編集後記

第3号では、今年度の2研究テーマの紹介を中心に、来たる3月22日の成果報告会と交流会の案内もさせていただきます。じつは5年間実施してきた「未来の京都創造研究事業」は、この3月末で終了することとなりました。「京都らしい研究テーマ」にこだわり続けてきた本事業。5年間にわたって研究者、京都市職員、企業、NPO、市民、学生のみなさまにご参加・ご協力いただいたことの一部を振り返りたいと思います。少しでも興味を持たれたら、ぜひご参加ください!3月22日(火) 17:30~キャンパスプラザ京都です。

公益財団法人
大学コンソーシアム京都
シンクタンク事業担当 水田、矢野

E-mail mirainokyoto@consortium.or.jp

電話 075-708-5803

URL <http://www.consortium.or.jp/project/seisaku/think-tank>

